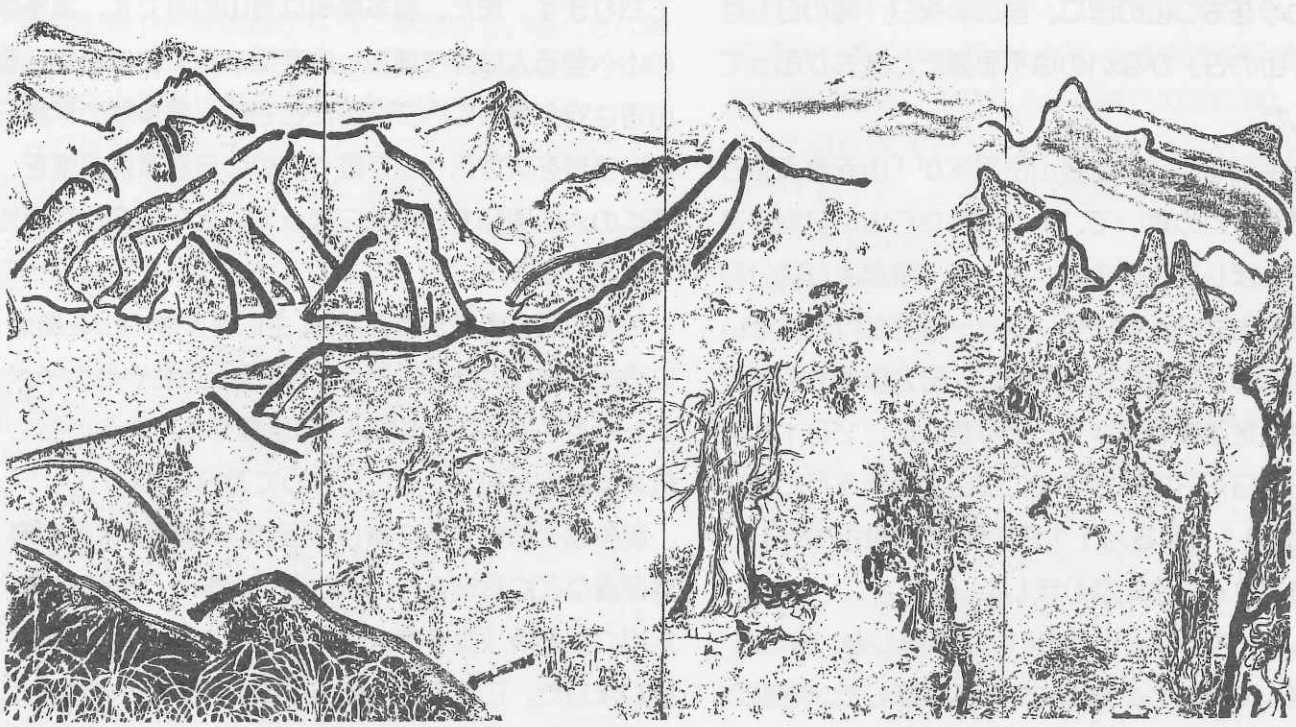
来さっせぇ 奥多摩 《第42号》
平成28年7月15日
(一社)奥多摩観光協会



「武蔵野國多摩郡奥多摩山紫水明圖」　画・向原 常美　＜四曲一双の半双絵＞

来さっせぇ・夏の奥多摩へ

奥多摩でいい汗かいたら、帰りがけに天然温泉でひとっ風呂浴びて気持ち良くお帰りください。

先ずは、この夏にぴったりの俳句を紹介します。

江戸時代、姫路城主を兄にもつ酒井抱一の俳句「千代にほふ鶴の出温泉や夏しらず」と小河内の温泉神社境内にある温泉碑に刻まれています。

そして昭和１０年代、詩人の北原白秋は、ダムの底に沈む小河内村で１６０首もの和歌を詠み、同じころ、脚本家・向田邦子は、「子供のくせに肺を患い、保養のため今はダムの底に沈んでしまった奥多摩の小河内村で一夏をすごした。」と小学３年生の頃の奥多摩を懐古しています。

今、奥多摩町内には、本格的な天然温泉「もえぎの湯」以外に昔ながらの小河内温泉水を湖底から汲み上げて公設民営の「はとのす荘」をはじめ各宿泊施設で入浴することができます。

１８７３（明治６）年に横浜で印刷・発行されたＪＡＰＡＮ ＷＥＥＫＬＹ ＭＡＩＬ掲載の「多摩川渓谷旅行記」を奥多摩町在住で、ご主人がイギリス人のボイラン・三枝さんに翻訳していただきました。

著者のアーネスト・サトウは、イギリスの外交官で日本の幕末～明治を見た外国人として知られ、西郷隆盛や坂本龍馬とも交流のあった人物です。

サトウは、氷川村（現・奥多摩町氷川）で愛宕山のユニークな山容を「木々に囲まれ高く尖った岩山に目を奪われる。トウモロコシ畑に囲まれた小さい村落や農家の麓を通り、それはスイスの山々の高地を思い起こさせる。」と書いています。その後１４３年、サトウの目を奪ったユニークな形の愛宕山やスイスの高地を思わせる奥多摩の山々は今も健在です。この機会にぜひ、夏の奥多摩へお出掛けください。

（岡﨑 学）

～“山の日”にちなんで～

８月１１日は国民の祝日「山の日」です

今年から、8月１１日は国民の祝日「山の日」です。山の日の意義は、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ということです。

日本は、国土の約７３％が山地・丘陵地帯であり、約６８％の国土は森林におおわれ、国民の生活にも深いかかわりをもつ山の国に、国民の祝日「海の日」はあるが「山の日」がないのは不思議だと誰もが思っておりました。

日本山岳会をはじめ主要山岳団体が「山を考える日をつくろう」との思いで、７年程前から山の日制定運動を開始しました。その後、民・官・政および諸分野に運動が拡大され、登山やレジャー分野だけではない山の日制定づくりを全国に発信し、国会議員も超党派で山の日制定議員連盟が立ち上りました。２０１４年３月に山の日祝日法案が国会に提出、同年５月に可決されて、２０１６年8月１１日に最初の国民の祝日「山の日」を迎えることになりました。

日本人は、古くから山を敬い、山に親しみ、山の恵みに感謝して自然とともに生活してきました。現在においても、山は私たち日常生活の中に深くかかわっており、人間が生きていく環境保全には必要不可欠な存在であり、生物多様性や地球温暖化の抑制などの重要な役割を担っています。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」という山の日の意義は、人それぞれの立場などで受けとめ方が異なってくると思いますが、山と人との深いつながりを考えながら、山を想い、山の恵みに感謝する気持ちをもって、有意義な「山の日」にしていただくことを願っております。

奥多摩町は、町の９４％が森林であり、東京都の最高峰雲取山をはじめとする標高１０００m以上の山岳に囲まれ、豊かで素晴らしい自然に恵まれて「山の日」の意義がピッタリと感じる町です。美しい自然の中での観光、温泉、奥多摩わさびをはじめとする特産物などのたくさんの山の恵みを堪能することができます。豊かな自然の中の散策は森林セラピーとなって健康増進の恩恵が受けられ、山の日を満喫されることは間違いありません。「山の日」を機会に、奥多摩町にはさらに多くの人たちが訪れることと思いますが、美しい山や自然に親しみ、たくさんの山の恵みを堪能しながら、山への感謝の気持ちをもっていただくことを願っております。また、奥多摩町は登山の町です。奥多摩の山へ登る人は年々増加し山を楽しんでおります。登山者は安全登山に心がけるとともに、奥多摩の素晴らしい自然を次世代へ引き継ぐための自然環境保護を、多くの人に周知する機会になっていただくことを期待しております。

日本山岳会東京多摩支部は、主に奥多摩の山を拠点に登山活動などをしております。登山活動や他のイベントなどを通じて「山の日」の意義を多くの人たちに伝えるよう努めていくことにしております。

奥多摩で活動するに際し、地元奥多摩町の振興や自然保護などにも役立ちたいと考え、昨年、奥多摩町南氷川に集会所「奥多摩ベースキャンプ（ＢＣ）」を開設しました。これを活動拠点に奥多摩の山への登山、安全登山の啓蒙、自然保護などの活動を積極的に行うとともに、地元関係機関や住民の人たちとの連携をもって町の活性化などに少しでも寄与していきたいと思っています。8月１１日の山の日、１３日・１４日の夏祭りの際には、奥多摩ＢＣなどで山岳映画上映、山の写真展、山のスケッチ展などを開催し、奥多摩を訪れる人たちに更なる山の素晴らしさ、山の楽しさを伝えたいと思っておりますので、ぜひご来場をお待ちしております。

8月１１日の国民の祝日「山の日」ができたことで、多くの人たちが山への関心を持ち、山へ出かける機会をつくり、山を楽しむことと思います。その際には「山の日」の意義を少しでも考え、山の恩恵に感謝していただければ大変ありがたく思います。

（日本山岳会東京多摩支部　石井　秀典）

夏から秋の奥多摩山歩き
～ワンポイントアドバイス～

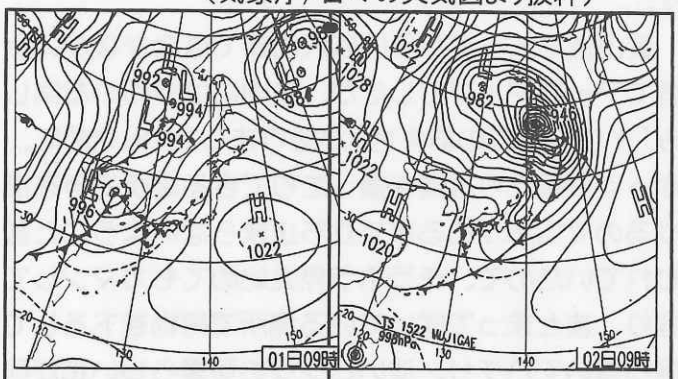
今年も奥多摩に暑い夏がやってきた。これからのシーズン、山の天気で気になるのは雷と台風である。雷の怖さについては前回とりあげた。また、台風については早い時期から気象庁の進路予想が発表され、登山者としてもそれなりに心の準備ができる。そこで今回は前線に伴う降水に焦点を充ててみたい。

梅雨前線や秋雨前線が本邦に停滞しているときに降る雨は、台風や熱帯低気圧が南海上のはるか彼方にあっても集中豪雨や長雨となり登山は控えたい。

一方移動性高気圧の後にやってくる寒冷前線では、その傾きが大きいほど足早に通過する。

今号では昨年10月1日～2日、友の会の皆さんが雲取山に登った折の事例について取り上げてみたい。

（気象庁/日々の天気図より抜粋）



平成27年10月1日(木)午前9時	平成27年10月2日（金)午前9時
低気圧、急速に発達	低気圧、記録的発達
北日本を中心に大荒れ。	北日本は引き続き大荒れ。

奥多摩駅前に集合した一行36名は薄日のさす中、鴨沢から堂所を経て奥多摩小屋を14:00頃通過。途中から雲は徐々に濃くなり、巻き道でヒカリゴケ等の観察をする頃には霧雨となった。それでも16時前には山荘に到着、ほとんど濡れなくて済んだ。

夜、日付の変わる頃から本格的な雨となり翌朝の出発は1時間遅れの7:30とした。この時点で既に雨具は不要、9:30頃には晴れ間も出るほど天候は急速に回復した。

２日間を振り返ってみると、前線の通過は夜明け前で、気象庁の天気図では傾斜の大きい寒冷前線が足早に通り過ぎたことが分かる。

どんなに天候が良くても登山に雨具は必携である。数日前から天気図と仲良くし、現地での観天望気と合せてより快適な山歩きを楽しみたい。

山での気象遭難といわれるニュースを聞く度に、出発の判断ミスが悔やまれてならない。（冨士 光男）

山岳遭難事故事例

Ａさん（発見者）は５月８日、日原の奥、八丁橋にバイクを置いて孫惣谷（まごそだに）林道を水松山（あららぎやま）に登った。そこから長沢背嶺をタワ尾根の頭（滝谷の峰）を経由してタワ尾根をウトウの頭まで来た。ウトウの頭から再びモノレール出合まで戻り、バリエーションルートを孫惣谷方面に下った。急な下りから等高線に沿った道になり歩きやすくなった。しばらく巡視道を行き、ウトウ沢に着いた時、上方に人らしきものを発見した。

62 歳女性４月 30 日から行方不明になっていて捜索中であった。Ａさんはそのまま下山、日原の駐在所にその旨を連絡した。

遭難した女性の登山計画書によれば、一石山、金袋山、ウトウの頭、酉谷山、長沢背嶺、天目山、ヨコスズ尾根を経由して、東日原に帰る予定であった。日帰りのコースとしてはハードであるが、避難小屋に一泊しても良いように、その分の食料は用意していた。

登山歴は 10 年以上、いつもは複数の人で登山を楽しんでいたが、今回は単独の山行となった。当日女性の夫も、他の用事があり家を空けていた。そのため、夫が家に帰ったのが５月３日、帰っているはずの妻がいないので、警察に捜索願を出した。テレビ、ラジオなどにゴールデンウイーク中の事故として大きく報道された。捜索は登山計画書により、タワ尾根コース、長沢背嶺、小川谷、ヨコスズ尾根、倉沢までの広い範囲で捜索を実施した。しかし、孫惣谷は捜索範囲になかった。そのため発見はできなかった。

５月９日、捜索を開始、ウトウの頭近くから孫惣谷の方向に 30mほど滑落していた女性を発見、遭難から８日後のことであった。

ルートの一石山から金袋山、ウトウの頭は登りのコースとしては、そんなに迷うようなコースではない。尾根道を上の方に行けば道は広くわかりやすかった。ただし、道標はなく特に下る時には別のルートに迷い込むことはあると思った。

なぜそのようなコースに迷い込み、滑落してしまったのか？万全の準備と、時間的余裕があったのに、どうして？

（小峰　一郎）

～行ってきたぁよ～

自然散策③「山のふるさと村トレイル」

５月１９日 快晴　奥多摩駅９：30 集合

ガイドより危険な動植物や、山菜と間違えやすい毒草の注意事項を聞いてバスへ。

小河内ダムを経て、峰谷橋下車。真っ赤な峰谷橋を歩き、トンネルを通って麦山浮橋（ドラム缶橋）へ。生まれて初めて渡る 220m の長いドラム缶橋はドキドキでしたが、多少の揺れに注意しながらも、湖面をわたるさわやかな薫風を感じながら、無事に対岸へ辿り着き安堵する。

湖畔の小道は、何とも気持ちの良い新緑の木漏れ日の中、道端の春の植物に時々目を奪われる。
落とし文が所々に。白い藤のようなニセアカシア、猿猴（エンコウ）カエデ、三本でも二人静（フタリシズカ）等々。ガイドの説明を歩きながらのメモは、後で見て何て書いてあるのか、我ながら理解に苦しむ。

そうこうしながら、山のふるさと村に到着。
少し遅れぎみの野鳥専門ガイドと一緒の二班を待ち、キャンプ村の方へ移動。

途中、私は初めて見る白い房状のような花が咲いている木はエゴノキ？いや絶対にエゴではないと。もしかしたら大葉（オオバ）アサガラ？と疑問を持ちながらの昼食を。
その後旧加茂神社に。ダム建設により、くき沢、日指、南の集落の氏神様は京都の由来も深い歴史のある神社。その氏神様は、今は小河内神社にまつられているとの説明を聞いた後、馬頭観音から尾根の遊歩道、山ふるトレイルを散策、ビジターセンターの方へ。

先程の大葉（オオバ）アサガラ？が気になり、ビジターセンターで正しい名前を聞くことに。スマホの写真を見て、白雲木（ハクウンボク）ではと図鑑を見せて下さる。ビジターセンターから、湖畔の広場の方へ行った所にも咲いているとの事で今一度確認へ。丸い葉で白い房状の花が、一本の木にみごとに咲いて白雲木と確認することができ、昼食前の疑問がすっきりと。

ふるさと村のバスで奥多摩駅へ。今回もお天気に恵まれ、楽しく奥多摩の自然に触れながらの一日でした。

このイベントに参加するようになって、歴史も深く、自然の豊かな奥多摩が身近に。そして毎回新しい発見があり、ガイドの説明もよく、会員の方々とも気楽に話し合うことができ、楽しく参加させてもらっています。　　（奥多摩友の会会員：澤田 アイ子）

金毘羅・鉄五郎新道～大塚山

４月１５日金曜日、晴れ。募集は３０人でしたが、参加者はもう少し多かった様に思いました。グループ分け、ガイドさんの紹介、準備体操等の後、それぞれのグループごとに出発。私のグループは参加女性５名＋ガイドさん１名＋全体のリーダーさん１名でした。

登山道の入口までは、ネットでよく紹介されているルートとは違い、国道を横切り、そのまま進んで万世橋を渡ってすぐ右折、多摩川を右手に見ながら林道を進み寸庭地区へと向かいました。道標等はありませんが、車の通りやアップダウンの少ない大人数のグループには歩きやすいルートだったと思います。

登山道に入ってからは広沢山まではなかなかの急登でアップアップでしたが、途中には今回のお楽しみ「イワウチワの群生地」がありました。出発前に、ゆっくり観たり写真を撮ったりできる場所で声を掛けるので指示があるまで立ち止まらないようにと言われていたので、チラホラ見え始めてもガマンして登り、まとまって咲いている場所で荷物を下ろして落ち着いてパチリ。淡いピンクの可愛らしい花が何輪も咲いていました。踏み荒らされたり盗掘されたりすることなくこれからもずっと楽しませて欲しいなと思いました。

広沢山から大塚山まではそれまでよりは少しだけ優しい登り。この日はかなりの強風が吹いていて頭上から思いのほかしっかりとした枝などが落ちてきたりしていましたが、この広沢山から大塚山への途中で枝打ちの現場のすぐ横を通りました。驚くほどにしなり揺れる木の上で森林作業員の方々が作業中でした。時につかまりまた枝を打つ、自然相手のお仕事の方達の何と頼もしいことか。健全な森林を守るため、これからも安全に作業を続けていただきたいと思いました。

この後、電波塔横の最後の急登を頑張って、大塚山山頂で昼食。強風のため下山路を御岳山の表参道に変更し帰路に就きました。

（奥多摩友の会会員：大野 まどか）

奥多摩樹木雑考

巨樹のからくり

中日原のバス停から鍾乳洞へ向けて歩を進めると、やがて右手の斜面に湧水が顔を出します。名づけて「幽水栃の雫」。その言葉にひかれて湧水が出ている急な斜面を見上げると、繁みの中にトチノキの巨樹が傲然と立っています。これにも名がついていて「水垂のトチノキ」。斜面につけられた危なっかしい階段を登っていくと、コクサギ、オオバアサガラ、アブラチャンなどの湿性の樹木、石灰岩地帯に生育するミヤマクマヤナギ、急斜面でもよく生育するカエデ類などが観察されます。この湿った斜面こそ、湿性植物のトチノキの適地(生理的適地といいます)なのです。大きく生長したトチノキは、急斜面で伐採をまぬがれ、人々の畏敬の念にもはぐくまれて巨樹になったのでしょう。林床には、親木から離れたトチノキの稚樹がたくさん見られます。

倉沢のバス停から日原トンネルへ向けて歩を進めると、すぐ右手の崖に「倉沢のヒノキ」の標識があります。標識の所から１５分ほど登った尾根に、ヒノキの巨樹がこれもまた傲然と立っています。立っている場所は東日原からの尾根道(廃道)が、倉沢集落（現在無人）からの道と落ち合う大きな岩場です。巨樹の周辺はモミの大木が多く、落葉広葉樹の木々を圧倒しています。ところで、ヒノキやモミなどなどの針葉樹は樹形が整っており、奔放に枝を伸ばす落葉広葉樹とは、光の奪い合いでは不利です。そのためか競争相手の落葉広葉樹の大木が育ちにくい土壌が薄く痩せていて乾そうしやすい岩の多い尾根は、そこに適応したヒノキにとって競争相手の少ない適地（生態的適地といいます）なのです。大きく生長したヒノキは、尾根道の分岐点の目印として大切にされ、かつ信仰の対象として大切にされながら巨樹となったのでしょう。ちなみにヒノキの巨樹の根本には、石造りの祠の跡らしきものが残っています。

厳しい環境にも適応しているヒノキやモミは、さしずめ“競争に弱いが逆境に強い植物”といえますね。そのような生き方には、あこがれを覚えます。

（橋上　一彦）

奥多摩の野鳥

今回はツグミ科の鳥を取り上げてみました。日本で記録のあるツグミ科の鳥は 40 種類ほどですが、ご存知の冬鳥のジョウビタキやシロハラ、ツグミ、その他にイソヒヨドリ、トラツグミ、夏鳥のアカハラなど。そうだ！アカコッコもツグミ科で日本の固有種です。（三宅島など伊豆諸島にのみ生息する）

さて、その中で夏鳥として東南アジア方面から繁殖のため渡って来るダンディーな鳥、クロツグミを紹介します。

ムクドリぐらいの大きさでオスは黒っぽい顔で下部から腹、下尾筒まで白く胸の下部と脇腹に黒の縦斑点もようがあります。メスは下面は白く黒の斑点、胸側、脇腹は黄橙色をしています。

森の高い木の梢で美しい声で「キョロ、キョロ、キョコ、キョコ、キャラ、キャラ、ツリー」などとよくさえずります。すばらしい美声の持ち主です。

奥多摩にも毎夏やって来ます。私は山のふるさと村の某所で２年連続しっかりと目にすることが出来ました。

クロツグミは低山から亜高山帯の針葉、広葉、混交林、広葉樹林、渓谷沿いの森林で繁殖しています。うすぐらい林内を好み、開けた所にはあまり出て来ない。地上をはね歩いて餌を取る姿はツグミに似ており落ち葉や土をくちばしでかき分け餌をさがします。個体数の少ない鳥で年々日本に渡って来る個体数が少なくなって来ています。だから運よく出会えた時はバードウォチング大好き人間には興奮のあまり双眼鏡を持つ手がふるえる気がします。

クロツグミはなぜ秋になったら南方へ帰って行くのか、留鳥として日本にとどまってくれないのか、と願わずにいられない。しかし鳥たちが命がけで渡りをする大きな理由は餌に大きく左右されているようです。すなわちクロツグミは昆虫を主な餌としており、冬になるとほとんどの昆虫は地上から姿を消してしまいます。これがクロツグミにかぎらず夏鳥達が南方へ去っていく大きな理由です。日本へ夏鳥として南方から渡って来る鳥は他に、ツバメ、オオルリ、キビタキ、コマドリ、コルリ、センダイムシクイ、メボソムシクイ、カッコウ、ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチ、そして猛禽類のタカの仲間のサシバなど…奥多摩の春から夏にかけて、留鳥のモズ、ヒヨドリ、キジ、ヤマドリ、漂鳥のルリビタキ、ウグイス、アオジ、など多くの野鳥たちのさえずりを聞きながら奥多摩の自然がいつまでも豊かである事を願いながらゆったりとした気持ちで耳をかたむけましょう。

（畑　幸夫）

夏から秋　奥多摩山歩き
～イベント案内　８月から１０月～

奥多摩観光協会では、多くのイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内いたします。

希望される方は、往復はがきに参加したいイベント名、会員番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、奥多摩観光協会までお送りください。（抽選の場合あり）詳しくは奥多摩町観光案内所まで、お問い合わせください。

※会員以外のお客様がご希望の場合は、事前登録が必要です。

No.14　8月8日（月）　山里歩き
阿弥陀堂御開帳と鳩ノ巣熊野神社
No.15　8月11日（木）　鋸山～大岳山～御岳山
No.16　8月23日（火）　自然散策檜原都民の森
No.17　8月24日（水）　鶏冠山（黒川山）
No.18　9月5日（月）　海沢三滝
No.19　9月14日（水）　自然散策日原倉沢林道
No.20　9月27日（火）　本仁田山
No.21　10月6日（木）　鷹ノ巣山　屈指の眺望

第８回　奥多摩アートフェスティバル
「おくてん」2016　9/17(土)～10/16(日)

今年も「おくてん」が開催されます。奥多摩の魅力にひかれて、この土地で活動するアーティストたちが自らのアトリエ、工房、ギャラリーを開放する１ヶ月間のアートの祭典。

期間中にアトリエ訪問のツアーやウォーキングによるツアーも予定しています。

是非この機会に奥多摩の芸術家のみなさんとの交流をされてみてはいかがですか？

詳しくは「おくてん」のホームページをご覧ください。

http://okuten.jp

東京府馬匹畜産組合連合会　ってなに？
トウキョウフバヒツチクサンクミアイレンゴウカィ

「奥多摩むかし道」にある「馬の水呑み場」に書いてある文字です。東京都が東京府の時代、競馬場を造ったり、競馬を開催していたそうですよ。

八王子の中野にも競馬場があったそうですよ。

奥多摩情報局　夏祭り特集

8月	6日	海沢　山祇神社　神庭の神楽
	7日	海沢神社　獅子舞　（寿楽荘、体験農園広場）
	13,14日	奥氷川神社　獅子舞　（13日　奥多摩花火大会）
		南氷川のお囃子
	16日	境　白髭神社　獅子舞（神社後、境集会所広場）
	21日	鳩ノ巣　熊野神社　獅子舞
		白丸　元栖神社　獅子舞
	28日	大丹波　青木神社　獅子舞
		小留浦　山祇神社　獅子舞
		栃久保　根元神社　獅子舞
9月	4日	日原　一石山神社　獅子舞
	11日	小河内　原　獅子舞（小河内神社、ふれあい館）
		川野　獅子舞　（小河内神社、ふれあい館）
		峰沢（くぼさわ）　鹿島踊り　（小河内神社、ふれあい館）

詳しくは町ホームページ　暮らしのガイド-教育文化スポーツ-文化スポーツ-郷土芸能　をご覧ください

奥多摩の方言　これ何のこと？

- チョロッケ

前号の答え　バカッチョは　ジョウビタキ
チチンプイプイは　セキレイのことでした。

施設案内
奥多摩　*水と緑のふれあい館*
奥多摩３Ｄシアターが新しくなりました

小河内ダムや奥多摩の自然の映像を、迫力ある立体映像で目の前で楽しむことができます。放映時間は約１６分です。

1. 奥多摩の森は生きている
2. 水を貯える森の不思議

以上を交互に上映しています。

お問い合わせは奥多摩水と緑のふれあい館
電話　0428-86-2731

表紙の水墨画　墨彩画家　向原常美
「来さっせえ」41号表紙の屏風絵の右側部分です。中央に描かれているのが、倉沢の檜です。

次号発行予定：平成28年10月15日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会